

1923年(大正12年)〔19歳〕 旧制水戸高等学校 1年生

「辰雄日誌 1923」No. 2 (1)

——1923年4月9日～30日——

小池辰雄

「斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ。」(ローマ書8・26)

「それから幾年、かくて私の人生に嵐が来た。殆ど父を知らない私にとって、父とも頼っていた長兄政美が北京で悪性チフスに倒れた〔1921年9月22日〕。その遺骨をたずさえて帰路に着いた母が黄海海上で緑内障で失明した二重の悲嘆の中で受験勉強をしなければならなかった。旧制水戸高校に入学〔1922年4月〕はしたが、初夏に腸カタルで入院騒ぎとなった。一ヶ月余りで退院した〔1922年7月30日帰京〕ものの体力は消耗していたので休学となった。

この休学中に、長兄政美の書架からふと取りあげて読んだのが内村鑑三著「宗教と現世」。こつして、食わず嫌いであつたキリスト教へ脚を踏み入れた。

骨皮筋衛門的すじえもんになった私ははじめのうちは読書もおぼつかなかったが、次第に回復して読書の氣力もでて来たので、なつかしい亡兄の本箱から書籍をとり出して読んだ。その最初の本が内村鑑三先生の『宗教と現世』であつた。

やがて新学年が来て、私は再び水戸へ戻つた〔1923年4月〕。病気をしたために、休学中に信仰の世界に踏み込み得たことは何ものにも替えられぬ収穫であつた。私はそこにハッキリ神の摂理を観ることが出来た。外側はともかく、私自身は内面に於いて別人となつて水戸へ歸つた。友人達も氣がついて私を清教徒(ピューリタン)などと綽名あだなした。

このようにして1923年の早春から、内村先生の聖書講義を聴くべく、丸の内大手町なる私立大日本衛生会講堂の大集会に参会し始めた。水高時代は、胃腸の調子が一進一退であつたが、ゆるされる限り、大手町の大集会に参加した。これは水高時代の健康状態からくるマイナスを償つてあまりあるプラスであつた。」

〔編集者註…小池辰雄著作集第六巻『随想集』より抜粋〕

○1923年4月9日(月)

快晴。ここに、私の愛する私の日記の第二冊目を記すに至つたことは嬉しい。私の飲むの声の絶えざる間は私の日記は絶えぬであろう。この日記帳は兄上の生前に、直接兄上よ



り戴いたものである(第一巻も)。故に私のペンがこの紙の上を歩くとき、言うに言われぬ懐かしき感じを、私は右の手を通して感じるのである。

水戸の第一日は静かに静かに明けて行く。

〔註：旧制水戸高等学校は1920年4月設立。辰雄は1921年、水戸高校入試に失敗するも1922年に入学したが、急性腸カタルに罹り1年休学。その秋、兄の書架から内村鑑三著『宗教と現世』を採りて読み、特に「青年に告ぐ」の一文にとらえられ感動する。新約聖書に初めてくらくいつく。〕

昨日の風雨は全く去つて居る。昨日の雨は今朝の潤いを齎^{もたら}して居る。

その清澄なる大空、その清新なる空気、その生々澁刺たる新緑に萌ゆる草木、その喜々たる小鳥の囀声、その飛々たる一胡蝶の軽快なる舞い、而してこれらは皆、日の光と水の光との中に光る。

恵まれたるこの朝よ。我はエホバを讃めまつるに言辭なし。我は唯高く高く仰ぎ瞻^みるのみ。天然の美の美わしさよ。我は水戸を愛せず、その天然を愛す。我は東京を愛せず、その天然を愛す。東京の桜よ、汝等は俗眼^{ぞくがん}と俗塵^{ぞくじん}とに接すること多ければ多き程、禍なり。俗眼に称えらるれば称えらるる程、禍なり。我嘗て彼等を(上野の)雨の降りたる夜、我が懐かしき兄上と共に相携えて訪れしことありき。汝等、塵と人にとに親しまず、雨と無人にとに親しみ、昼の俗光に親しまず、夜の落ち着ける光に親しむときに、汝等は我に真の姿を、真の心を表わしてくれたり。登校の途、日光、筑波の連峰を望みて、山!山!と云うのであった。登山者はかれこれ言うであろう。併し私には、山!山!のみであった。

東京へ数通の音信をした。3時頃、田舎の屋外風呂に入った。桐寮へ来て、心身爽快である。「静」「浄」は我が字、我が友である様だ。

松本厚君、四郎君が来た。桐寮は4人となった。附属には何となくよいところがある様だ。今の附属はどうだろう。水戸第1回の卒業、西川君と平山君、美事帝大(東京)へ入つてお目出度い。夕食は4人一緒にしたためた。食後、休憩。7時頃、買物に出掛けて、寮はからっぽである。田舎はのんきである。我らが心ものんきである。故に、よい。鍵なるものはないが如しである。鍵、これは東京のものである。冷やかなる処のものである。鍵とは何であるか。これは神を入れぬものである。神の最も喜び給わぬものの一つである。我等にとつて、こんな無益な嫌なものはない。万物は神のものである。そこに鍵の必要は少しもないわけである。こんな明瞭なことが何処にあるか。然り、鍵を愛してこれを用うる人程、冷たき者である。神に叛くものである。神を知らぬものである。

星よ、星よ、我が易らざる永遠の友よ、汝の姿は今日、実に美なりき。汝の心は実に浄かりき。我、人と町を歩いて、我が足、地につかず、我が心、人につかざりしは何ぞ。汝、我を呼び、我と語りしに非ずして何ぞや。汝居らずば、我如何で生きんや。冬の夜の星と春の夜の星と東西に相見えて、共に喜々たり、輝々たりであった。牡牛、オリオン、大熊、小熊、カ



シオペア、大犬、小犬、双子、龍、海蛇、乙女、牧者、なんたる大勢の会合ぞ。而して彼等は我を迎うるに満腔の歡びを以てしたり。我、彼等を受くるに、身余りに小なりき。心余りに小なりき。眼余りに小なりき。之かえつて、彼等の我に溢れたる所以なりき。

みそらによるこぶ、ナザレの星々、我も飛びて星とならん。

「平民詩人」の初めを読んだ。“Walt Whitman”が第一に書いてある。詩人ホイットマンの詩を読んだことは未だない。しかし、内村先生のこれを読んでみると「ホイットマン」はどうしても私の友達らしい。天真爛漫な人、それが私の最も愛する人だ。神から授けられたそのままの人、人のこしらえない人。それが私の友とした人である。

ホイットマンは今晚から私の友達である。彼は早速私の心に飛び込んで来てくれた。彼の物語りは尽きそうもない。よい友達が一人出来た。私は賑やかすぎる様である。併し、かれらは騒がしい友達ではない。私と共に黙するときには黙してくれる。歡ぶときは歡んでくれる。振るい起きるときは振るい立つてくれる。

ホイットマンは早速、私の机の上に現われた。ルーテルの写真の後ろから。彼は田舎の好々爺然たり、である。そこに我が敬服し、敬愛する処がある。彼の毛髪は、生えるそのままになっている。彼の襟元は無造作である。彼の帽子は頭にのっかるだけのために、のっかっている。彼はどう見ても自然そのままである。故に彼は貴い。「彼の帽子の下に大宇宙がある」大自然が蔵せられている。永生が生きている。(本に二枚、写真があったから。たぶん誤って二枚入れたんだろう。或いは、私に対する天意であろう)。一枚を日記にはりつけた。机上のは別のもの。

○1923年4月10日 (火)

快晴。午前11時から講堂で入学式があった。新入生は速くから入って居た。僕は後から入った。落第生なる者は一人も居なかった。しかし自分は平氣であった。

学校の講堂は確かに立派である。全国高等学校中で第一かも知れぬ。しかし僕は講堂の立派に無頓着であった。感心しなくなかった。講堂の立派をほこる人々——如何なる人々かを云う必要はない——が可愛そうである。その心が可愛そうである。心の心が可愛そうである。

校長の演説があった。至つて平凡なものであった。そこに熱を見ることが出来なかった。そこには形式的の言辞と形式的の威厳があった。しかしそこに愛の我々の心をひくものはなかった。演説は死んで居た。生徒等は相変わらずの心で聞いていた様である。ゆえに立派な講堂も死んだ殻であった。冷たかった。2、3年の総代の挨拶は無邪氣で、若干のしたしみそこに結んだ。1年総代の返答、別に評もない。

式なるものに熱と愛がないのは今日の通例である。「式」という言葉を耳にすると、皆、一樣の情氣と侮蔑の心を持つ。ゆえに式は常に式で終つてしまう。何故、人々の心が純真



なところへ立ち帰らぬか。熱のある真面目さに帰らぬのか。

午後から運動をした。夕食は美味しくいただけだ。7時少し過ぎに、附属の新入りの人々が来てくれた。佐竹、島田、武井、安藤。9時頃まで話して帰った。この度、附属の連中は全体で14人となった。就床、10時半。

○1923年4月11日(水)

曇。授業が今日から始まった。顔も名も知らないので未だ変である。自然科学、先ず天文学をやる。星と聞いて実に嬉しかった。一年間、天文ばかりやつても僕は飽きまい。いよいよ興味が湧くことと思う。僕は天文のために天文をやりたいくはない。また数学がそんなに好きでないから出来ない。僕のやりたいのは、数学的天文でなくて詩的天文、人生的天文とでも云いたい様な天文である。

運動、実に愉快だ。運動場は広い。空気は好い。東京の学校よりかい。故に水戸はよい。桐寮は静かである。寮は騒がしい。寮にもよい所はあるが、桐寮に更により所がある。我が信仰を保ち且つ強からしめるものは、我が聖書と宗教書とのみである。私に友なし。

水戸に「大手町」なし。我、環境によつてその方へ引き寄せられん畏れあるは免るべからざる処である。故に我はますます神を仰ぎ奉ることを要す。我、神を仰ぎみて人々に対するとき、敵なる人は返つて私の信仰の力を強からしめる。故に敵、必要なり。我が敵は憎む敵に非ず、愛すべき敵なり。我はただ信仰によつて立つのみ。

母上から有難き御手紙を戴いた。母上を思うと、尽きざる万感が湧いて来た。母上は僕のために毎日祈つて居て下さる。是、母上の御心を読んで明々白々である。これに対して感謝の言がない。

母上を慰め奉ることは、自分の最もすべきことであつて、最もしたいことである。兄上からも音信があつた。

我はどこまでも、独り水戸に主の御旗を守りて立たん。

私、神の讚美歌を自由に歌わんとして歌う能わざる、これ一大苦痛なり。

○1923年4月12日(木)

雨後晴。

私は今日、謹んで主に申し奉る。

私の信仰、薄^{うす}ぎたるを今日感ぜり。そは我が心、放れいたればなり。

我、主に居りて主の如く行きんとするの心に欠け居たりき。

我、聖書と宗教書を読むの時を自ら得ざりき。自らの心の放れたるにより。

而して我は人に染まんとしつつあるに気づかざりき。

然れども我は全く主を忘れ奉りしものにては非ざりき。



主は、我を瞰^み給いたるにより、我、主を瞻^み奉るを得たりき。
願わくは、赦し給え、我が不信の罪を。亜孟^{アメン}！

我、『基督の如く』を今晚読んで、我が心の主にたちかえりたるは誠に幸なりき。
我、『テニソンの詩について』を読んで、歓びの水をそそがれたるは幸なりき。

我、聖書を読んで、神の御言に接したり最も幸なりき。

我、嘆じて主のもとに走りし時、主は直ちに我に近づき給い、

我が歓びはわきぬ。而して我は真剣になりて、ますます御恵に浴さんとす。

○1923年4月13日(金)

晴、寒風。昨夜の星は素敵だった。今朝は北風が吹いて寒かった。しかし田舎の畠道を通って学校へ行くのは実に愉快である。桜が満開である。小学校の生徒が嬉々として遊んでいる。その小鳥の如き愛らしき姿。田舎の自然の兒よ。空の色、その碧には我は実に、常に、讃歎せざるを得ぬところである。

学校の課業が愉快になって来た。新しき心のため。運動また実に愉快である。運動場日本一なるためではない。風呂へ入って上った後の愉快さ。何とも言わん方なしである。

団勝磨君(理甲)の室を訪うた。彼を見るたびに、その背後に我が兄上を見ざるを得ぬ。兄上が嘗て彼を教えて居たことがあったからである。故に彼は、私にとって何となく懐かしいのである。

……〔英文省略〕……

(“Like Christ”The second day)

これは今日の私の叫びであります。

○1923年4月14日(土)

晴。登校の気持のよさ。気候は今日もしまっている。雲雀^{ひばり}の声！その向上の翼！彼は天に向かう！数学の先生は、愉快である。教壇をあつちこつちと、始終動き廻っている。そして講義の速さは特急である。自分のはなすだけが終ると、時間の来た来ないに拘らず已めてしまう処などは、てきぱきとしている。内藤珍磨とかいう話である。名からして滑稽味を有している。最後の時間は修身、校長の引見式。僕は早速、かけ足で帰り、大急ぎで水戸駅へ走った。丁度正午についた。発車まで10分間、お弁当はサンドイッチと親子飯。お腹が空いていたので平らげてしまった。

車中『平民詩人』を読んでいた。窓外を眺めては「自然」と「農夫」とに親しみ、書を見ては詩人と親しんで。愉快であった。

『労働の鍬^{くわ}の上に、日光をして嬉々として躍らしめよ』(Whittier)
は目撃した所であった。鍬を手にする農夫は知らず、然れども車中の私、これを見て彼を



讃美し、^{せんぼう}羨望さえたしたのであった。神聖なる労働に従事する彼等を蔑視する人々は罪深き哉。哀れなる心なる哉。

生々澁刺として帰宅し、母上を喜ばして上げた。武田叔母様も喜ばれた。明日は「大手町」へ行ける。待たれるのは午前十時である。

○1923年4月15日(日)

快晴。起床8時、朝食をとるに暇なく、直ぐ出掛けた。靴屋に寄った。それから銀座へ行つて、丸善でブラウニングの詩の『サウル』の訳(斉藤勇訳)を買った。教文館は閉じて居たのでがっかりした。それよりさき九段下の向山堂へ行つた。ところがこれは休業である。もう少し考えたら休業のことは解るはずであつた。大手町へ行つた。

基督伝研究、第22回である。「隠れたる宗教」。マタイ伝6・1～18、ルカ伝11・1～13。讃美歌18、185、446(婦人)、303。詩篇第62篇の朗読があつた。ペテロ前書2・22～25。

「²²彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、²³また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたまふ者に己を委ね、²⁴木の上に懸りて、みづから我らの罪を己が身に負ひ給へり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん爲なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。²⁵なんぢら前には羊のごとく迷ひたりしが、今は汝らの靈魂の牧者たる監督に歸りたり。」

また口マ書5、6章も見るべし。

仏の画家ミレーは、当時の人々にその画を卑しきとなされて、受くべからざるの辱めを受けた。彼は世のため人類のために画を描いたのであつたが。しかしこの辱めを以て彼は不平を云わずして「己も十字架を負う」のを知つて、更に更に己れのその考えのもとに進んだのであつた。

善をなすもの、悪の者のために^{しいた}虐げられる。そこに世の罪を贖うの理が存する。キリストの贖罪は実に大にして特別唯一のものである。而して我々は「彼に倣いて」その後を踏むべきであるのである。

内村先生の「祈る場所」を伺い、私は今日^{じゃくやく}雀躍して水戸に向かつたのである。ブライアントの詩にある如き、聖き祈りの場所「森林」を私も見つけたいものである。先生の、柏木に居を定められたのは、一つにここに存していたと云うことである。而して今、人家のために妨げられて居るとのこと。先生の御心お察しする。天然の殿堂、森林に独り、声高に神に祈るの感はどうなであらう。

「帝劇の大音楽もこの純真な叫びには到底及ばぬのである」

と云われた通りならんと信ずる。その叫びは天に上りて、人に聞こえず、何たる淨き音楽であらう。私も純なる心を有て真に神に祈り奉るとき、かかる処にて祈りたいものである。信仰の厚くならんことを偏に願ひ奉る。



矢作義之君(附中)に大手町で会った。彼、福なる哉(中学生である)、信仰に志している。彼の信仰の人とならんことを切に願ひ奉る。聖霊、願わくはますます下り給え。

帰宅すると直ぐ、佐伯純一様が来られた。驚き且つ大いに喜んだ。我が兄の親友、佐伯様はこの間、長いこと中耳炎で病臥して居られた。一時はなかなか心配なのであった。彼をお見舞したとき、彼は少しも悲観して居られぬ。平常の通りに莞爾^{かんじ}かで居られた。信仰の偉大なることよ。神は、彼を未だ未だ長くこの世に置き給う思ひ召しは明らかとなった。兄上の遺稿のことであつて下さった。これ等の3、4人の方々の御尽力に深く感謝するのである。

お昼は清見君と一緒に美味しく戴いた。母上も姉上も元気で居られて嬉しかった。百合の花を庭へ下ろしてやつた。自由にしてやつた。鉢に居るのは嫌な様である。5時50分発で帰水した。

『平民詩人』は今日も車中の友であつた。懐かしい懐かしい、カシオペア、オリオン、プレアデス、ハイアデス、ペルセウス、馭者、等が西の方に悠然と横たわつて歎びの光を放つていた。

少女よ、桜の花の花卉を散らして面白がることをやめよ。汝は花を愛でる様で実はいじめているのに気がつかないのか。車中、全く独りであつた。荷物が重いので人力に乗つて帰つた。私は人力に乗るのを好まない。彼、曳くものは人である。我、乗る者も人である。人が人に曳かれて乗り行く。私はどうしてもこれが当然なことと思えない。彼を同情する。彼は汗を額に流して走る。それを見て私は楽な氣になつて居られない。心が落ち着かない。神の喜び給うことでないこと明瞭である。私、降りて、彼に礼を云わざるを得ない。彼は要求以上にやりたくならざるを得ない。それで少しは氣がおさまる様である。しかしそんなことで氣が少しでもおさまるのは未だ本當でない。人力に乗ることを成るべくしないのに勝る贖はない。

「安息日を淨く守るべく」私は勉強をすまい。形式的に非ず、心より。大手町の二時間はいつもに変わらず、よかつた。讚美歌446番、彼女の宗教上の論戦に敗れて直ちに叫んだ、純真の信仰の声であると伺つて、好きであつた歌はますます好きになつた。婦人方の合唱は実に奇麗で、心にしみ込んで来て何とも云われなかつた。

按摩の笛の声を聞いて、或る人は云う、音楽的である、巧妙である、なかなか熟練したものであると。また或る人は云う、あんなのを仮装行列の余興にしたら痛快だろうと。人々よ、君達の心に同情の心が一点もない様である。あの音を聞いて直ちに哀音と感ぜざるや。直ちにその笛の音のもとを思い見ざるや。その音はどこから出る。如何なる人々から出るか。汝等の心は石の如く固く、氷の如く冷やかである。

私は、かく云う人の名を記憶したくない。故にここに記したのは誤りであつた。しかし人々に、一般の人々に、もつともつと同情の心がありたいものである。



○1923年4月16日(月)

晴。風のない静かな春らしい日であつた。小学校の桜が正に満開である。幼児はその桜の下で愉快に遊んでいる。畠の間を行く。雲雀が上る。彼女は前にも後にも進退することなくただ上るのみである、風に向かつて。歡び歌つて上る。我は之を讚美の声と聞く。人の為の死せる音楽は何であるか、天然の声に如かず。

私の近頃(2、3ヶ月前より)読む書は何であるか。友である。真の友である。学友の到底及ばざる友である。私は彼等を読むに非ずである。私は彼等と語るのである。彼等は私より偉い友である。彼等は語る。彼等は教えてくれる。私は彼等に答う。また彼等と語る。愉快に心から。私は答える。何を以て。青い鉛筆を以て。殊に彼等の愛すべき語に対して。私は驕つて答えない。謹んで答える。故に青い鉛筆を以て。天然の空の色を以て。天然の水の色を以て。

青い色は愛すべき文字の傍らを然り！ 然り！ と云つて走る。

青い色は謙遜なる文字の傍らに感謝なり！ 感謝なり！ と云つて走る。

青い色は悲痛なる文字の傍らを涙なり！ 涙なり！ と云つて走る。

青い色は澆刺たる文字の傍らを歡喜なり！ 歡喜なり！ と云つて走る。

書にしてそれと語るとき、私の右の手に青い鉛筆の躍り込まざるものは、我が書に非ず、我が友に非ずである。宗教書来る、詩来る、伝記来る、まれ罕に小説来る。

近頃、人々に評判の多くの小説なるものは我が友に非ず、我が書に非ず。学友よ、何を求めて書を読むや、そこに生命ありや、そこに真面目ありや。汝等は、評判に従いて読むに非ずや。汝等、その文の流暢なるを慕うに非ずや。その語の面白さを好くに非ずや。汝等の智に生命ありや。汝等、雑薄なると思わざるや。

誰の何々を読んだとか、誰の何々はどうか言う話が愉快にして、汝等の心を慰むるものなるか。ああ、うすつぺらき友よ、あやまれる友よ。

ああ、私に深刻の淋しみがある。それは「友無し」これである。深刻なる淋しみ。ああ。

神よ、我に友を与え給え。我に友はあり、然れども、真に愛を交換する友は一人もない。彼等のあるものは学ぶときの友なり。又あるものは遊ぶときの友なり。然れども淋しき哉、我に共に語るべき友なし。愛は流るれども、流れ来る友の愛なし。我は多くのサタンの弟子の中にあり。サタンの声は彼等の口より発せらる。驕れる声、嘲笑の声、侮蔑の声、悪評の声、浮薄ふはくの聲、怒りの声、呪いの声。わが耳はかかる声を聞かんがために作られたが如し。然れども我は信ず、神はかかるためには作り給ひしに非ざるを。

神よ、我に友を与え給え。我、友より神の御言を聞かんと願う。我が淋しみの最大は之——友なき事。

神よ、然れども我は先ず感謝せざるべからず。我に絶大の友あり。神の独子なり、我が主なり。その他に、否、彼の中に我が新しき友はあり。敬すべき友はあり。パウロ先生なり。



まだ有り、聖アウガスチンなり、ルーテルなり、クロムエルなり。ホイットマンなり、ホイッチャーなり、ワシントンなり、リンカーンなり、ゴルドンなり、リヴィングストーンなり、ブライアントなり、ブラウニングなり。

まだまだ勝^あげて数うべからざる程あり。内村先生なり、畔上先生なり、藤井先生なり、亡兄なり。まだまだ多くあり。隠れたる、知られざる友もあり。

まだあり、まだあり。み空には愛すべき不易の友星あり、地には草あり木あり、花あり、鳥あり、山あり、水あり。

誠に我が友は我が内に外に溢れてあり。我の、神に、友を与え給えとの願いの理由、失せたるが如し。然れども、我が深刻の淋しみは依然として歓びの下に、暗き蔭をとどむ。

神よ、我は切に願ひ奉る。我に友を与え給え給わんことを。主、イエス・キリストに依りてのみ結ばるる友を与え給え。アーメン。

ああ、我に、更に更に深刻なる願ひあり。祈りあり。わが母上の眼開かざるか。我が母上は遂に見る能わざるか。

神よ、母上を憐^{あわれ}憫み給え、アーメン。この願ひは、この祈りは聴かれざるか。

神よ、母上の眼を癒し給え。この切なる懇願、祈祷は遂に聴かれざるか。

然れども、……涙なり……然れども。

万事は主の御旨に従いて我安し。

ああ、感謝すべき哉。

○1923年4月17日 (火)

晴。今日は水高我が校の創立3周年に当たる記念日である。簡単な式があつた。餅菓子^{へきえき}は流石のあま党も辟易する様な膨大なるものであつた。お汁粉が出来た、これで。午前はよく遊んだ。お昼は美味かつた。午後からは少し曇がちだったので家に居た。2時頃入浴した。ロバート・ブラウニングの“Saul”を読み始めた。『聖書の研究』4月号を読んで感じた。慰められ、力を得るところは多々であつた。「私の基督教」の所を読んで、彼の3月18日のお話を想い出して、感じは更に深かつた。力は更に強く与えられた。私の旗幟^{きし}は更に鮮明にされた。

私は先生にまねて、信仰を持つとはしない。私の実験しつつある信仰が先生のと合するまでのことである。私は、私の信ずる信仰によつて——永遠の生命によつて——生きたものである。これに依らざれば到底生きて居られぬと信ずる。信仰はしかし生きるための手段ではない。信仰そのものが生きるその全体である。

私は今日もまた言う。私の最も大なる苦しみは、自己という恐ろしいものの扉がしばしばこの生命の泉に対して閉じることである。そして私の所謂友なるものは、私のこの扉を閉じしめよう閉じしめようとしているのである。この苦しみと淋しみに勝る所の歓びと力



とが私にあるときの感謝ほど有難いものはない。

彼自身は弱きルーテルが、彼自身は弱きクロムエルが、私に在るときに私のこの悲しい扉は全く開いて淨き飲びの泉は流れこんで来る。

私、兄上の書を読むときに、そこにのこされたる青い色、青い線のまた、私の鉛筆の同じく走りたい所の線なるを見るときに、私は非常な愉快を感じる。非常な力を感じる。それは「兄は我が友なり」という叫びの自ら発するがためである。おのずか

昨日は15日に会った(大手町で)矢作義之君に書き、今日は同じく15日に家へ来て下さった兄上の親友、佐伯純一様へ御手紙を認めた。

○1923年4月18日(水)

春雨、晴。人より、不信の徒より、基督者より受ける誤解はどうしても免れない様である。彼等は妙な目を以て私を見る様である。私は一向かまわない。彼等が何と見ようと、思おうと。ひが目を以て私に臨む彼等が更に可愛そうになる。彼等は人間だろうか。彼等の心は何だろうか。彼等は私を馬鹿にする。私の基督者なるが故に、ある偏見を抱いて嫌い、且つ薄い心で私を嘲弄する。ちやうろうしかし私は一向かまわない。彼等のたのむ所は生意気な、おつちよこちよいな自己のみである。二本すじ高等学校生だぞと云うもののみである。私のたのむ所は、そんなものと比較のできるものではない。ここにそれを記すのもつたいない。誤解のはれるときは何時であるか知らない。恐らくは私と彼等とが相對しているときにはあるまい。或いは、私と彼等とが同時に生存しているときではないかも知れぬ。否、この場合が多いにちがいない。

彼等がこの世に存在しているときに、この世の空気を呼吸しているときに、この誤解を知ったら彼等は幸福である。私はどんなにもして彼等を祝ってやろう。彼等が死の真際に於てそれを知っても、彼等は幸福である。しかし多くの彼等は最後の審判まで知らぬであろう。ああ、遅いかな。

彼等について随分鋭く書いた。しかしどうも仕方がない。

母上よ、母上の眼は何人の人を救いしぞ。母上の眼によって人は眼を非常に注意する様になった。現に2、3人のそこひの人は早くこれを知って——母上の眼のことを知ってその如何なるものなるかを聞いて——癒なおったのではありませんか。

母上も主によって人のために喜ばれた。母上は犠牲となられた。母上は、その犠牲によって人の眼を癒し得たことを御満足である。誠に貴いものである。人に幾万の金を与えるよりも遙かに大なる慈善をなされた。私はこれを思つて母上の御眼に最大の敬意を払う。

ああ、私の今日は誠に孤軍奮闘なる哉。神、私を水戸に放ち給えり。使命や大なり。感謝はいやます。高島の伯母様に5枚に亘る心からの御手紙を差上げた。



○1923年4月19日(木)

春雨。今日の雨こそ、煙雨というものであった。今、梨の花が咲き乱れている。名の如く花小路である。体操はこの煙雨の中であつた。少し寒かったので風呂に入った。

ロバート・ブランニングの「ソウル」「Saul」の第18章実に宗教的の絶叫である。実に生命と力とに溢れている。この詩は之によつて生きている。最高潮に達している。この書は叔母様から戴いたお金で買った(丸善で)。心の糧とせんために。そしてその目的の誤りなく果たされつつあるは誠に有難い次第である。

「人はパンにのみ生きるものに非ず」

私に食物をあれこれと考える必要はない。神はよくなし給う故に。

『宗教と現世』の「青年に告ぐ」を読み誠に嬉しかった。言々、皆然り！然り！であつた。先生の書は有難い。日本にかかる書があつて私は感謝に堪えぬ。

浅薄なる基督者と、誤れる基督者と不信徒が真に神に感謝するに至る日は本当に何時のことだろう。涙がこぼれる。

私の級に基督者らしい人が一人居る。今日、彼の室を訪ねて見た。幾ばくもなくして私は失望せざるを得なかつた。彼は浅い、所謂基督者だつた。しかし所謂基督者というよりも更に不信の徒に近い様だから、まだ罪は軽いかも知れぬ。可愛そうに彼には信仰がない。彼は学研的に宗教を見ている。これでは到底信仰に入ることの出来るものでない。彼の指より十字架の指輪を即刻とるべきである。十字架がけがれる。ああ恐ろしい。やっぱりは独りであつた。私はこれによつてますます臍はぞを固くされたのであつた。

私の眼は光る。私の口は閉まる。私の眉毛は立つ。基督教青年会の会合が今晚あるそうだ。そんな形にどうして添い得ようぞ。私は独りで沢山である。私に教会も牧師も要らない。所謂教友も要らぬ。彼等と交わつて禍は更に大である。それよりも不信者の中に居る方が返つて安全である。私は私の信仰によつてのみ立つ。

今日、私の友は、私の中に居る。また人に非ざる周囲のものにある。犬にある、豚にある、馬にある、草にある、木にある、鳥にある、空にある、星にある。また、赤兒にある、小兒にある、書にある。今日、私の友は、東京にある。

私には書翰の上に友が居る。書翰が唯一の慰めである、談話である。

○1923年4月20日(金)

晴。私達——信者が神や基督のことを語れば、彼等——敵——人々はきつと嘲弄ちやうろうするに違いない。彼等は私達の戴き、感謝する神を見ることが出来ないのである。彼等はただ、仮想のもの——神を——としているのである。自分の困つたとき、若しくは冗談に神を口に出せる。神は一種の仮説的、迷信的なものと思つてに違いない。彼等の学びにあるときの心は何であらうか。先生の言は既に彼等の玩弄がんろうせんとするものとなつてゐる。彼等の互



いに語るものは何であるか。その言は直ちに嘲弄的に走り、青年の口にすべからざることは、今や、公然、口にせられているのではないか。浮薄なる哉、人々よ。彼等は高等学校生である。高等学校生は彼等である。

○1923年4月21日(土)

細雨。第4時を欠席して、12時の列車で帰京した。細かい雨がしめやかに降り出して、景色が咽った。帰宅したのは5時10分前であった。お客様が相変わらず多数居られた。今晚、渡辺様で私を呼んで下さった。築地の支那料理(上海亭)の御馳走に与ったのであった。青木の人は全部、それから、渡辺様の方々と皆で15、16人であった。時刻に遅れたのは悪かった。テーブルに就いた。箸を摂った。箸を持つ前に、お祈りをしたのは誰であつたらう。そして何人居たであろう。私は知らぬ。しかし私に於ては、これを忘れては食事はとれなかったものであった。御馳走に酔い、酒(ビール)に酔う方々は居られた。御馳走は美味しかった。しかし愉快に、心から飲んで戴くことは出来なかった。もとより、呼んで下さった人には感謝するのではあるが。しかし親類の方々であつたから、別に不愉快ではなかったのであるが、若しこれが心からの人々の集まりであつたら、更に更に遙かに快き晩餐であつたことは言うまでもないことである。

支那料理はこの晩初めて戴いたのであった。支那料理なるものを知ったわけである。築地の岸へ出た。弦月が西天に懸かっていた。星が輝いていた。川の波は静かであった。実に寂寞たる月夜であつた。私はここに佇んだ時、嘗て兄上様とそこに居られる青木の人々と舟(ボート)をここに浮かべたそのかみを思い浮かべざるを得なかった。私の眸は天の彼方に向かった。私は涙ぐんだ。私は胸に手を当てた。そのとき響きがあつた。兄は私と共に居られた。私の胸は踊った。血は沸いた。暫くしてまた、淋しさに戻った。私はまた涙ぐんだ。しかしどうしても兄上は私を離れ給うものではなかった。

築地の大聖堂の側へ出た。十字架を仰ぎ瞻た。岩瀬様と、私は心の中で呼ぶのであった。彼は如何に答えて下さったことでしょう。私が中学5年のとき、水泳部である晩——風雨繁き晩——記録掛の務上、ペンを独り走らせて居たとき、電報を小使が持って来た。そこで菊池と二人で停車場へ迎えに行ったことがある。来られた方は、井上玄一様と岩瀬一民様であつた(山岳から)。そして岩瀬様が「小池の弟」と聞かれたときに、満面に言うに言われぬ喜びの笑を湛えて私の肩を叩いて下さった。その時その顔が私の眼前に髣髴としていいて何が浮かんで来よう。

岩瀬様は眠っておられる。しかしその時、インスピレーションは閃いた。若し私に詩が作れるならば、歌が詠めるならば、彼に対する愛慕の情を述べるであろうが。兄上の病の経過が割合によく、そしてかなり持ちこたえていたので、一日、彼は同心町の私の家を訪ねて、

「君！ 大丈夫だぜ、安心したまえ！ きつと癒^{なお}るぜ！ 大丈夫だ！ 安心したまえ！ それはよかった！ 実は少し心配して来たんですが、それはよかった！」

と言って、兄の死の報せが家に無かったことを聞いて非常に喜んで下さった。彼は兄上のためにどんなに祈って下さったことであろう。しかし、悲しむべし。その最も切なる親友の願いも、神は聴き給わなかった。

神には深き深きお考えがあつた。私等の測り知り得ない深い思いがあつた。兄上は飲む勇んでその大恩恵を享けて御許に召された。彼は「幕を一枚剥いで」天の御国へ姿をかくしてしまった。再び顔を現わさない。私もまた「幕を一枚剥いで」御国へ召される時が来るまでは、彼に会うことが出来ない。彼に会う、兄上に会う、岩瀬さんに会う。ああこの確信のますます強からしめられんことを。私はこの確信の真の獲得に至るまで一生を苦しめても可である。本当にこのためならどんなにでも苦しみたい。これは、私が私に求めているうちは来ない。父なる御神に、わが主イエス・キリストに懇願、祈念しなければ得られない。基督に倣^{なら}わ非^ずんば、信仰に依らずんば得られない。

奇しきかな、岩瀬様も突然、腸チフスにおかされて、流星の如くこの世を去られてしまった。その死の報を突起得た当時の私の悲しみと驚きは如何ばかりであつたろう。1922年2月3日午後7時。兄上の死の後、5ヶ月足らずのことである。主によりて結ばれたる永遠の親しき友たる岩瀬さんと兄上とは5ヶ月足らずで相前後して(同じ病を得させられて)こんな美わしいことが何処にあるうか。深きは御恵なる哉。

岩瀬さんは兄の葬式の折には、色々とお世話を下された。印刷のことから、当日のことから。丁度、1922年2月7日(僕の誕生日)である。私は岩瀬様とこの世のお別れをせんために築地の大聖堂(教会)へ行つた。私が教会という所へ入つたのは之が初めてであつた。始めから涙であつた。私はその時未だ基督者の死の歓びを知らなかった。岩瀬さんは飲んで逝かれたであろう。

一、奏楽 (オルガンの音、実に莊重、鎮痛であつた)

一、挽柩聖歌 (会葬者一同起立)

一、詩90篇

一、聖書朗読 コリント前書15章20～58節

一、聖歌155 陰府よ汝の勝はいづくに在りや、コリント前書15・55

一、履歴朗読

彼、この世を去るに当たつて言われし語に「願わくは御許に召されし政美君のもとに」と。熱切なる謙遜なる語を以て彼もまた主の御許に召されんことを願ひ奉つた。そして、彼もまた本当に御許へ行かれた。

この語を聴いて居た私は泣かざるを得なかった。岩瀬さんは飲んで逝かれた。彼の笑やかな、はればれした顔が眼前に浮ぶ。私も、兄と岩瀬さんの間ほど親しき友を得たいもの



である。切なる願いの一つである。

一、聖歌 第384(愛誦聖歌) 我等憚らずして至聖所に入ることを得。

1. うきよのあらなみ のがれてやすらふ
- しずけきみなとは めぐみのみぎなり
2. いともかくはしき よろこびのあぶら
- かしらにうけまし めぐみのみぎにて
3. すみかへだつとも 主にあるみたみは
- ともにこそあはめ めぐみのみぎにて
4. せちなるいのりに あめのとひらけて
- かがやくみさかえ みぎのうへにみゆ

一、祈祷 (跪坐)

一、聖歌125 我ら斯く多くの見証人に雲の如く囲まれたり。

一、祝祷

一、奏楽

霊柩、聖堂を出でたる後、会葬者は一同退堂する。これが式の順序であった。当時の恩、実に切であった。帰宅10時半、消灯11時。

〔名刺貼付：岩瀬一民、東京市神田区裏神保町6番地〕

○1923年4月22日(日)

晴。兄上の御命日という日である。大手町へ行く時を今やおそしと待つのであった。母上は駒込の教会へ行かれた。吉原の貞ちゃんが昨日から遊びに来ていた。貞ちゃんが母上を伴って行って下さった。

今日は、基督伝研究、第23回であった。「天空の鳥、野の百合の花」。マタイ伝6・19、34。ルカ伝12・12、34。先生は、野の百合として、花瓶に挿してあったアネモネを一つとつて語られた。基督に倣いて。切によい御言を今日もまた伺った。マタイ6・31、

「**よらば何を食ひ、何をのみ、何を著んと思ひ煩うな**」

実に、三越、白木の前に大書して東京市民に告げてやりたいものである。先生のこの言を聴いて、講堂の我々は愉快な笑顔を発した。「単純なる眼」Simple Eyeの御旨を承り、これにより世人を考えて彼等の、くだらぬ複眼をあわれまざるを得なかった。どうして単純にかえらぬか。彼等は彼等の小児時代よりも劣れるものである。

「単純より複雑に迷い込める人々よ、再び単純に帰れよ。然らずんば汝等は永久に迷うなり」

と私は新聞紙に大書してやりたい。お話を伺っているときにA God-intoxicate Man「神に酔っている男」と如何に人が嘲笑するとも指さすとも、私は、かかる人とならんと、飽くまで



せんと確く思った。

また、本当に思った。若し水戸から東京まで一分間で来たらせて、非常に面白い劇を見せてくれると云う人が居るならば、私はその劇を見る代りに大手町へ御言を伺いに行きたい。毎週、東京へ出て来られないのは一大遺憾事である。しかし私は水戸へ放たれたる者である。大手町の先生方を通しての御言はなくとも、聖なる樂はなくとも、私に語ってくれる、天然の草と木と鳥が居る。神はこれを与え給うた。聖旨ならば私は歡ぶのである。詩第73篇、藤井先生の朗読であつた実に莊重な音調で誦せられる。畔上先生、コロサイ書3・18、25、

「子たる者よ、凡ての事みな両親に順え、これ主の喜び給うところなり」

(コロサイ3・20)

「汝ら何事をなすにも人に事うる如くせず、主に事うる如く心より行え」

(コロサイ3・23)

エペソ5・22。コリント前7・12、14。

信仰の行。私等が人と闘わんとする時、武器ありとすればその武器は、言にあらず、信仰の行である。敬虔なる、真面目なる、謙遜なる、信仰の行。これなくては基督者は、基督者ではなくなるのである。神を畏るる我々のなすべきは唯、この一行のことである。ああ、信仰の行。私もこれなくては基督でないのである。如何に聖書を読むとも、如何に大手町へ行くとも、如何に宗教書を読むとも、讚美歌を歌うとも。

今日、讚美歌は17、261、249(婦人)、181。249「主よ、み許に近づかん」。ああ何と云う、聖なる、切なる、我々の絶叫であつたことよ。

マタイ伝6章19節より、

「¹⁹なんぢら己がために財寶^{たから}を地に積むな、ここは蟲と錆とが損ひ、盗人^{ぬすびと}うがちて盗むなり。²⁰なんぢら己がために財寶を天に積み、かしこは蟲と錆とが損はず、盗人^{ぬすびと}うがちて盗まぬなり。²¹なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。」

この御言を聴いて讚美歌181を讚美したときの我々の心は何にたとえんであつた。貴きは基督者の歡びと感謝の涙である。

ああ、天に宝積まん哉。私はこのために一生を費やそう。ああ、大手町の2時間よ、汝は我が時なり。神の私に授け給う最もよき時の一つなり。出て来るとき、後ろから声をかける人が居た。それは嘗て会った矢作義之君^{やはぎ}であつた。彼は喜んで挨拶をしてくれた。僕も嬉しかったので東京駅まで彼と共に歩いてそこで別れた。附属の人。附属中学に彼が居る。年輩の近い上での私の唯一の友である。彼のますます聖靈をうけんことを祈り奉る。彼に私の友を見出したいのである。

神に懇願し奉る。この淋しき私に友を与え給はんことを。矢作君をして主による私の友



となし給わんことを。水戸に基督者は居る。水戸高等学校に居る。しかし不幸にして友とすべき基督者を私は見ない。彼は私の音信上の友である。音信上の友でも若し彼が真に友となってくれるなら、こんな嬉しいことはない。矢作君はまた私の家と関係がある。ご母堂と母とはお茶の水の高等女師範に於けるお友達である。また兄上(亡き)は大学時代に矢作先生は保証人になって戴いた。それ故に尚更、懐かしく思うのである。

兄上のために西洋菓子を買って来て、御霊前へお供えした。午後山本の姉上のお家へ遊びに行った。玄関の戸を開けた。そうすると、義坊、隆坊の二人が喜んで出てきた。水戸の羊羹のお土産をやったら、彼等は「ヨウカン」と聞いて大喜びであった。それにつづいて出てきたのが、この頃歩けるようになった富美ちゃんである。お父さんのお帰りと思っ

て出てきたらしい。知らぬ人の顔を見たので(実は2、3週間前に会ったのであるが)、吃驚したと見え、眼を丸(マンマル)にして曰く曰い難し的な面もちで僕をながめていた。その顔の、滑稽さ、何とも云えない、キューピーそのまま(イットセルフ)であった。

姉上、天真爛漫な姉上、本当に懐かしい姉上は、何時もの通りに僕を迎えて下さった。御馳走よりも何よりもその美しい心が絶大なる歓迎であった。かくの如き私も、どこまでも Spirit〔霊〕に生きたい。Substance〔物質〕に生きるは私にとって死である。親切の心の美わしき哉、同情の心の美わしき哉。

今晚は久しぶりで、母上、兄上、姉上と私とで一家挙つて晚餐を共にした。嬉しかった。しかし未だ本当のホーム、神に依るホームは本当に結ばれていると云い難い。生命保険の話が出たが、どうも私に於ては賛成出来なかった。

○1923年4月23日(月)

晴。午前には家に居た。嫌いな三角を2時間半勉強した。午後、向山堂へ本を買いに行った。『神の独子の意義』(畔上先生)、『三條の金線』(内村先生)とかねてより欲しい欲しいと思っていた本『愛吟』。之は亡き兄上から戴くのである。それからトーマス・ア・ケンピスの『基督に倣いて』の訳は、之を叔母様から戴くのである。この本唯一冊、書棚の一隅に残されているのを見た私は如何なるインスピレーションに打たれたろう。私のために、この本は私のために、名残されて居た。私は是等の書を有難く戴いた。

トーマス・ア・ケンピスは言つたそうである。

「すべての教師等をして黙せしめ、凡ての造られたものをして、汝のみまえに黙さしめ、

汝のみ我に語りたまえ」

と。彼の真剣、熱烈な信仰よ。彼によつて聖旨の示されること大なるを思う。私の書、私の友はここに一を加えた。彼等はしかし決して個々別々でない。彼等は皆、主によりて結ばれたものである。この意よりして友は一つを加えたのでないとも言える。知られざる友は多くある。ただその一つを私が見たに過ぎぬ。彼のゴルドン將軍はこの書を常に携帯し

ていたと云う。鞆^{かばん}(兄上が高等学校時代より用いられた、古き、而も私の唯一の、そしてまた、私にとつては世界中で一番よい鞆)を一つ携えて家を出た。親しき鞆は親しき書によつて満たされていた。母上は門口まで見送りに出て来られた。あつき握手を交わして私は雄々しく去った。母上は、私の角を曲がるまで見送つて居て下さった。否、それよりも更に長く、門口に立つて居られたに違いない。私の足の音の消えるまで。ああ。何たる情ぞ。私は之を目撃して、心の中で泣かざるを得なかった。

この度の東京帰りは、支那料理のためであるならば禍である。築地に我が兄上と岩瀬さんに会いに、にして福いである。大手町に聖き2時間を送るためにして、福いである。母上をお慰めせんがためにして、福いである。義坊、隆坊、富美ちゃんを喜ばせんがためにして福いである。而して、この母上の情を受けんがためにして最も福いである。

車中の友は誰であつたろう。私は『愛吟』(内村先生訳)を読み始めた。彼を愛して眠りし人、我が兄上、我が内に居られて、私と共にこの書を読んだのであつた。兄上と私とのコーラスに応じて彼の天然の空の色、水の色は「他の私の書」に対すると同じく、その文字の傍ら走るのであつた。

車中の3時間は、他の時にも勝りて楽しき時であつた。飽きる所でない。愉快で堪らなかつた。人々は車中に点々としていた。退屈そうな面つきである。電流不足の水戸市の薄暗さ、死の市であつた。寂寞^{せきばく}の外何もたらさなかつた。しかし雲間に輝く星々は今夜もまた私の友であつた。彼等によつて私の心は春であつた。

私は何をのぞんで桐寮へ足を急がせたであろう。高島様の伯母様の御手紙でなくて何であらう。果たせる哉、私の机上には読みたい読みたいこの御手紙が載せられてあつた。私は、繰り返して読んだ。こんな御手紙を今までに戴いた覚えがあるだろうか。もし、人が傍らに居なかつたら私は感謝の涙に咽び、我を忘れていたであろう。御手紙を抱きしめたことであろう。

このアネモノは床の間に置かれてあつた鉢植から一輪、採つたのである(註：アネモノの押し花がこの頁に貼つてある)。22日、大手町で内村先生がアネモノ一輪を把つて、パレスチナの野の百合を想い浮かべられて示された。それを今、想い起こしてここに。之を押し花にするのである。

火曜日に学校から帰つてこの花の床の間に咲いて居るのを見た。我は、直感的に大手町とその流れたる御言とを想起したのであつた。あまりの懐かしさに記念にと思つて一輪もらつた。

「然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき」(マタイ6・29)



○1923年4月24日(火)

雨、やや寒い。聖書、宗教書を読むこと、やや怠り勝ちなのは、誠に気持が悪い。だべるという語があるが、だべることほど罪なことではない。時間の徒費、精神の悪用である。だべって2時間も3時間も平気で費やす。常に時間を有効に過ごすということは決して、常に気を張って読書或いは有形的に収穫のあることをなせと云うのではない。勿論、休息は能率、健康の両面よりからして必要であるが、くだらぬ談話を30分も1時間も或いはもつともつと費やしては、これまた休息それ自身の要求にも反している。だべった後は気持のよいものでない。之を何とも思わずによくやることは、宜しくない傾向である。

○1923年4月25日(水)

晴。クロムエルの誕生日。不平、不満をよく抱く多くの人々は、有難い、愉快だ、と心から思うことがあるか。彼等には、心の満足の手段としてでも神を仰ぎ見よと云ってやりたい。日々、御名を称えて、感謝して暮らす永遠の歓びは、彼等の無想だも出来ぬ所である。この真理、こんな有難い真理があるのにどうして彼等は気が付かないであろう。

○1923年4月26日(木)

晴。今日は体格検査があつた。12貫(45kg)ない自分の身体には自分ながらがっかりする。しかし身体へ異状がなければ、少しも悲観するに及ばない。ところでそれはどうであるかというに、未だ胃の能きが弛緩して居る。それが癒ってくれると本当によい。支那料理に一因なきに非ずであつた。少しでも過食をすると、この弱い胃には応えると見える。

○1923年4月27日(金)

晴。この頃は実に絶好の天気である。風が吹かなければ本当によい。手紙があまり来ないので淋しい様である。

○1923年4月28日(土)

曇、烈風。夕方、自転車に乗った。好い道である。今日は三角の試験があるかと思つたらなかった。数学は苦手である。中学時代には英語の次に好きであつたが。気分が随うからであろう。文科なるが故に数学を疎かにしてよいということはない筈なのであるが。

○1923年4月29日(日)

烈風。水戸へ来てから、水戸で送る最初の日曜である。風は烈しい。塵芥は舞う。人々の心は不快である。しかし私は嬉しい。安息日なるが故である。朝から何とも言えない聖い気分である。行かんと欲して行く能わざるは今日の遺憾である、大手町へ。しかし主は



ところによりて居たもう者ではない。

10時が何となく待たれた。9時半から聖書が開かれた。詩篇第73篇を今日も読んだ。聖書の研究により一層、明瞭となり嬉しかった。ルーテルの詩篇第46篇も之を読んで、実に力強かった。大手町を思いつつ過ぎた。内村先生の熱切な信仰の言が聞こえる様である。ピアノの聖き響きが聞こえる様である。風が烈しくて散歩に行けなかった。入浴した。

「私の食前の祈祷をして形式的ならざらしめ給え」

不信者の中で独りこれを、食毎になすと、どうしても短くなり勝ちである。長いのを望むのではないけれども。

『基督に倣いて』トマス・ア・ケンピスを読んで、実に我が友と言つて書を抱かざるを得なかった。ゴルドン將軍の常に携帯して居たのも誠にこれに依つたからであらう。安息日、聖守の第一歩、なつて、神に感謝し奉った。之、私の心によつてに非ざりければなりである。私の安息日に勉強しないのは律法によつてではなく、神に対する授けられし心によつてである。

今朝、母上から御手紙を戴いた。母上は私のために喜んで下さる。信仰の未だ薄い私のためにこんなに喜んで下さる。私は慙愧に堪えない。母上のために、信仰の更に更に熱切となり行かれんことを祈り奉る。ホームはそれからだんだん出来て行くであらう。

2、27。

「主に依りまつりて善を行え。かくてこそこの土にいながら誠に活き

誠に神に養わるるものなれ」(詩篇37・3)

兄上よりこの御言を承つて。

○1923年4月30日(月)

満月、やや寒し。日記を書く時間のつい無くなるのは残念である。この頃、身体の具合がよいという程でないので、はやく寝たいので。書翰を認める時間、日記を書く時間はどうしても僕には必要である故に、友達とのつまらない、おつきあいは成る可く避けたいものである。亡き兄上の如く敏捷ならぬ僕は、どうも時間に迫られてしまう。これと雖も自分の心次第で、ややのろまの辰雄は敏捷の辰雄になり得ると信じている。今のところ体が一番大切だから。これといえども(日記)、睡眠時間を減じてまでもすることは出来ない。

矢作義之君から葉書をもらった。彼が書翰上の友である。彼は日曜日の大手町のことを詳らかに報じてくれた。誠意のこもった葉書であった。嬉しかった。これによつて讚美歌第232は有名な讚美歌の一つに加えられた。この歌を知つて本当に嬉しかった。

今夜は、自転車を駆つて靴屋へ行つた。満月下の自転車駆りもわるくはなかった。行きには月を望みながら、帰りには銀色に光る道を滑りながら。

